

就学前施設における防災活動の展開に必要な条件の探索

岡 本 和 花*・白 神 敬 介**

(令和2年5月26日受付；令和2年11月18日受理)

要 旨

本研究は、就学前施設における防災活動の展開に必要な条件を探索し、今後の防災の在り方を具体的に検討するための手がかりを得ることを目的とした。積極的あるいは特徴的な防災活動に取り組んでいる就学前施設として幼稚園2園を選定し、それらの園に勤務する園長2名と保育者7名を対象に半構造化面接を行った。発言内容は「防災活動が盛んであることの原拠」、「防災活動の実態」、「防災活動により目指されること」、「防災活動の限界」の4つの観点で整理された。分析結果より、今後の就学前施設における防災の在り方を検討する際には、「子どもの姿に応じた教育・保育活動」、「教育・保育活動を通した経験の積み重ね」、「視覚情報の有効活用」の3条件を考慮することがポイントとなることが示唆された。

KEY WORDS

childcare 保育, preschool 幼稚園, natural disaster 自然災害, disaster prevention 防災, requirement 必要条件

1 問題と目的

日本はこれまでに、多くの自然災害による被害を受けてきた。自然災害の中でも特に、地震発生の頻度の高さは顕著である。2019年2月26日に公表された「主な海溝型地震の評価結果（地震発生確率）」⁽¹⁾からは、今後も引き続き日本では地震が発生し、被災する可能性が十分にあることが読み取れる。

就学前施設には、「災害時要援護者」である乳幼児が多く在籍している。内閣府は、必要な情報を迅速かつ的確に把握し、災害から自らを守るために安全な場所に避難するなどの災害時の一連の行動をとるために支援を要する人々を「災害時要援護者」⁽²⁾と定義しており、乳幼児をはじめ、高齢者や障がい者、外国人や妊婦等が該当するとしている。この災害時の一連の行動をとる力が自助力であり、乳幼児はこの自助力を獲得していくための一歩を踏み出したばかりの状態である。したがって、就学前施設で取り込まれる防災活動は、子どもたちが災害時の自助力を獲得する初期段階に携わり、その基盤を構築していくという、極めて重要な役割を担うといえるだろう。

就学前施設における広義の「防災」には火災や不審者への対応なども含まれるが、本研究では震災による甚大な被害を防ぐという観点から、中央防災会議による「防災基本計画」⁽³⁾の「防災」の考え方を踏襲し、自然災害発生時への対策に限定し、その被害を最小化するように努めることと定義する。また、ここでの就学前施設とは、「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律」に記載されている幼稚園、保育所、認定こども園を指す（以下、施設と称す）。

土木学会は、就学前施設における子どもたちの災害時における自助力を獲得していくための防災活動の報告数が、小学校以降の学校教育における報告数と比較すると少ないことを指摘している⁽⁴⁾。しかしながら、徐々に就学前施設で取り込まれる防災活動の具体的な提案がなされてきており、その報告数は着実に増えている。その報告内容の内訳を概観すると、避難訓練の実施内容についての検討と日常的教育・保育活動を通した防災活動についての検討における報告が多数を占めている。避難訓練の実施は法律により定められているが、日常的教育・保育活動を通した防災活動を行うことは、各施設に任されているのが現状である。

日常的教育・保育活動を通した防災活動としては、文部科学省が「学校防災のための参考資料『生きる力』を育む防災教育の展開（改訂版）」⁽⁵⁾を作成し、その中で幼稚園において日常的な教育・保育活動として取り入れられるように具体的な防災教育・保育活動の実践例を提案している。また、教育あるいは保育分野からは「防災」に特化した単発的な教育・保育活動⁽⁶⁾⁻⁽⁸⁾、住居学の立場からは防災教育・保育活動に役立つ絵本の開発⁽⁹⁾⁻⁽¹²⁾が試みられるように

*上越教育大学附属幼稚園

**学校教育学系

なっている。子どもたちが災害時における自助力を獲得するためには、就学前施設において前述の提案や開発されたものが普及し、実際に防災活動として取り入れられていくことが不可欠であるだろう。日常の教育・保育を通した防災活動は、防災への関心が高い施設において取り組まれていることが予想される。したがって、防災への関心が高い施設で取り組まれている防災活動と防災教育・保育活動を可能にしている条件を見出すことは、今後の就学前施設における防災の在り方を具体的に検討する手立てとなり得る。

そこで本研究では、積極的あるいは特徴的な防災活動に取り組んでいる就学前施設の実態を調査し、就学前施設において防災活動を展開していくために必要な条件を見出すことを目的とした。なお、本研究では「防災に関する取り組み」を園全体や保育者自身で行う就学前施設における防災活動とし、一つひとつの保育・教育活動としての防災活動に限定しない。就学前施設の所在する地域により被災が想定される自然災害の種類は異なるため、普遍的な防災活動を具体的に提案することは困難である。一方、防災活動の展開に必要な条件は、自然災害の種類による影響を考慮する必要性が低いため、多くの就学前施設における今後の防災活動の展開に貢献することが期待できる。

2 方法

2. 1 調査協力者

岡本・白神（2019）は、2016年11月に災害危険度への認識レベルの異なる新潟県・栃木県・静岡県 の 3 県にある就学前施設を対象とした防災についてのアンケート調査を実施した⁽¹³⁾。調査対象地域の選定には、内閣府の「日常生活における防災に関する意識や活動についての調査（平成28年5月）」⁽¹⁴⁾を参考にした。アンケート調査では、静岡県の保育者は他の2県の保育者よりも、防災に関して正しい知識を有していることが明らかにされた。この結果から、静岡県では防災活動が盛んであることが推測される。

そこで本研究では静岡県の就学前施設に着目し、積極的に防災活動に取り組んでいる、あるいは特徴的な防災活動を行っているY幼稚園とZ幼稚園の2園に勤務する園長2名と保育者7名を対象としたインタビュー調査を実施した。各施設における対象者の内訳は、Y幼稚園が園長A、4歳児クラス保育者B、5歳児クラス保育者Cの計3名、Z幼稚園が園長D、3歳児クラス保育者E1とE2、4歳児クラス保育者F1とF2、5歳児クラス保育者Gの計6名であった。

2. 2 調査手続き

静岡県の危機管理部危機情報課、教育委員会事務局健康体育課、健康福祉部こども未来局こども未来課に、積極的に防災活動に取り組んでいる、あるいは特徴的な防災活動を行っている就学前施設がある自治体に関する情報の提供を依頼した結果、K市を紹介された。そこで、K市に積極的に防災活動に取り組んでいる、あるいは特徴的な防災活動を行っている就学前施設に関する情報の提供を依頼した。その結果、K市のこども希望部こども希望課からY幼稚園とZ幼稚園の2園を紹介された。紹介された2園の園長にインタビュー調査の目的と概要を説明し、調査協力の許可を得た。

調査は2017年10月上旬にY幼稚園とZ幼稚園にて実施された。インタビューは、比較的静かで戸を閉めることができ、漏洩の心配が少ない場所である遊戯室や会議室にて対面で行った。

インタビューは、あらかじめ準備したインタビューガイドに基づき、半構造化面接により実施した。インタビュー内容の記録はメモに加え、調査協力者の同意が得られた場合には、メモによる記録を補完する資料とするためにICレコーダーによる録音を行った。

2. 3 調査内容

インタビューでは、「災害への関心」、「防災に関する取り組み」、「災害への備え」、「就学前施設における防災の在り方」の4点を尋ねた。

「災害への関心」では、調査協力者の災害に対する関心の高さを把握するために、近年、日本各地で頻繁に災害が起こることへの関心について尋ねた。

「防災に関する取り組み」では、園長には自園で取り組んでいる防災活動について、保育者にはクラス担任として取り組んでいる防災活動について尋ねた。加えて、園長には自園以外で積極的、あるいはユニークな防災活動を行っている就学前施設の情報提供を求めた。

「災害への備え」では、災害に備えた職員間や保護者との関係づくりの在り方について尋ねた。また、災害に備え

た園外の機関との協力体制の構築,あるいは強化の在り方についても尋ねた。

「就学前施設における防災の在り方」では,今後の就学前施設における防災の在り方についての意見を求めた。

2. 4 倫理的配慮

調査実施に先立ち,次の3点を明記した研究同意書を作成した。第一に,調査への協力は任意であり,回答を拒否しても調査対象者に不利益が生じないこと,第二に,収集されたデータは研究目的以外で使用されることはなく,施設名や回答者が特定可能な形で結果を公表しないこと,第三に,調査によって得られた情報は厳重に管理し,個人情報の保護に最大限の配慮をすることの3点である。これら3点を調査協力者に伝え,研究同意書への署名をもって研究協力の同意が得られたものとみなした。

2. 5 分析方法

インタビュー調査で得られた発言内容を文字におこし,データを丹念に読み込んだ。そのデータの中から,今後の就学前施設における防災の在り方を検討するための手がかりとなり得るような内容が含まれているインタビューの発言を取り上げて整理し,考察した。

3 結果と考察

今後の就学前施設における防災の在り方を検討するための手がかりとなり得るような興味深い発言を取り上げ,内容の整理を行った(表1)。その結果,「防災活動が盛んであることの原拠」,「防災活動の実態」,「防災活動により目指されること」,「防災活動の限界」の4つの観点とそれらの観点を構成する8つのカテゴリーに整理された。さらに,「子どもの姿に応じた教育・保育活動」と「災害に対応できる体づくり」の2つのカテゴリーは,それぞれ2つのサブカテゴリーに整理された。

インタビューの平均所要時間は1対象あたり約28分であった。なお,各発言における「?」はインタビューが半疑問形で発言した箇所を表し,括弧内は著者が前後の会話の流れ等を踏まえ,必要に応じて補足した内容である。

表1 インタビューーによる発言内容の整理

整理された観点	カテゴリー	サブカテゴリー
防災活動が盛んであることの原拠	防災活動の他園との比較	
	防災意識の他園との比較	
防災活動の実態	子どもの姿に応じた教育・保育活動	同学年における子どもたちの姿の違い 各学年における子どもたちの姿の違い
	教育・保育活動を通じた経験の積み重ね	
	視覚情報の有効活用	
防災活動により目指されること	災害に対応できる体づくり	体力づくり
		反射的な災害対応行動の獲得
防災活動の限界	予測できない災害時の精神状態	
	変えることが困難な立地条件	

3. 1 防災活動が盛んであることの原拠

防災活動が盛んであることの原拠に関する発言は主にZ幼稚園のインタビューにみられた。また,Z幼稚園の多くのインタビューが,保育者としてこれまで勤務してきた他園での防災活動と現在の勤務園における防災活動との経験の比較を通して防災活動が盛んであることを認識しているようであった。防災活動が盛んであることの原拠に関する発言内容は「防災活動の他園との比較」と「防災意識の他園との比較」の2点に整理された。

3. 1. 1 防災活動の他園との比較

K市内における就学前施設に勤務する園長や保育者間では,Z幼稚園での防災活動が盛んであると認識されていることが示唆された。以下にその発言内容を整理する。

Y幼稚園の園長Aに,自園以外での就学前施設における防災活動についての情報の提供を求めたところ,Z幼稚園における避難訓練の内容について,<発言a-1>の発言をした。

<発言 a-1> : A

あそこ（Z幼稚園）は海拔何メートルなのかな。Z幼稚園は、うん、もっと何か海に近いもんだから。そこから、もう、もうほんとに走って走って、（Z幼稚園より高い位置にある）X高校の3階だか4階まで逃げるんですけどね。すごいですよ、あれは。

当初、インタビュアーが園長Aに対して自園以外の就学前施設における防災活動の情報提供を求めたところ、園長Aは「いや、ちょっと他のところは、分かんないけれども」と困惑した様子で回答していた。しかしながら、園長AはインタビュアーがZ幼稚園を訪問することを事前に知らされていたことを思い出したことを契機に語り始めていた。さらに、Z幼稚園の3歳児クラス保育者E2も、取り組んでいる防災活動の1つとして避難訓練の実施を挙げ、Z幼稚園における避難訓練の内容について、<発言 a-2>の発言をした。

<発言 a-2> : E2

他の園だと、まず園庭（に避難）って、園庭で（訓練が）終わってしまうのが、ここは、園庭では終わらないので。

保育者E2は、現在の勤務園であるZ幼稚園における避難訓練の内容と自身が保育者として勤務してきた他園における避難訓練の内容を比較することにより、Z幼稚園での防災活動が盛んであることを認識していた。

避難訓練以外の特徴的な防災活動としては、Z幼稚園の4歳児クラス保育者E2が、Z幼稚園における椅子の積み上げ方について言及していた。Z幼稚園では、地震の揺れで積んだ椅子が崩れてこないようにするために、背もたれを壁側にして積んでいくのとは逆方向、つまり背もたれを手前にし、壁に向かって椅子を積み上げていた。

3. 1. 2 防災意識の他園との比較

Z幼稚園では防災活動が盛んであるだけではなく、園全体の防災意識も高いことが予想される。幼稚園全体の防災意識は、主に園長や保育者の防災意識と子どもたちの防災意識により構成されと考えられる。以下にその発言内容を整理する。

Z幼稚園の4歳児クラス保育者F1は、避難訓練時の保育者の意識について、<発言 a-3>の発言をした。なお、保育者F1は前年度までY幼稚園の保育者として勤務していた。

<発言 a-3> : F1

地震が起こると火災とか、とにかく建物が倒れてくるかもしれないので園庭にってどこの園もやってると思うんですけど、やっぱり沿岸っていうか、海が近いので、津波の影響で、高い所に避難しないっていう意識っていうか。それはすごいこの幼稚園は、やっぱり、ならではって言うか。そうしていかなくてはいけない危機感っていうか、怖さがありますよね。

保育者F1の発言からは、幼稚園全体の防災意識の高さを読み取ることができる。また、F1は子どもたちの防災意識についても言及しており、<発言 a-4>の発言をした。保育者F1は、Z幼稚園の園長や保育者のみならず、子どもたちも防災意識が高いことを実感しているようであった。

<発言 a-4> : F1

すぐに何かあった時に逃げるように靴を履いたりだとか、あとは砂遊び・泥遊びの時は常に、靴を必ず傍にといいか、自分たちどこに（靴を）置いたかなっていうのが分かるような、そういう日頃から？いつ（災害が）きてもおかしくないっていう。なので身の安全っていうか、すぐに避難してっていう意識が他の園よりも高いと思います。

Z幼稚園の3歳児クラス保育者E2は、Z幼稚園に勤務したことによる自身の防災意識の高まりについて、<発言 a-5>の発言をした。

<発言 a-5> : E2

私たちも、この幼稚園に来たことで、すごく防災に関しての意識が高められてるところはあって、前にこう働いていた場所とはやっぱりすごく防災に関しても、園全体そして子どもも意識がすごく高いので、このぐらい（意識を）高く、常にこう、訓練なんかをやる？子どももそう意識が高くなるんだっていうのを感じて、なんか就学前の幼稚園・保育園でも、教師が作る環境だったり、こう訓練のやり方次第で子どもたちの意識も保護者の意識も変わるので、ほんとにこの状態を維持して、次の人にも、次の代というか、続けていきたいなと思いますね。

保育者E2が園長や保育者の防災意識に留まらず、保護者の意識にまで言及していた点は着目すべき点であろう。

3. 2 防災活動の実態

防災活動として取り組んでいる内容に関する発言はY幼稚園とZ幼稚園の両インタビューにみられ、「子どもの姿に応じた教育・保育活動」、「教育・保育活動を通じた経験の積み重ね」、「視覚情報の有効活用」の3点に整理された。なお、これら3点は防災活動に限らず、保育者が通常の教育・保育活動の内容を構成する際にも共通して考慮する点であるといえる。

3. 2. 1 子どもの姿に応じた教育・保育活動

幼児期は心身の成長が著しく、その個人差は大きい。そのため、年少・年中・年長の各学年での子どもたちの姿は大きく異なる。さらに、同学年の子どもたちであっても、毎年、子どもたちの姿は異なる。そこで、発言内容を「同学年における子どもたちの姿の違い」と「各学年における子どもたちの姿の違い」の2点に整理した。

(1) 同学年における子どもたちの姿の違い

Y幼稚園の園長Aの＜発言b-1＞と4歳児クラス保育者Bの＜発言b-2＞は、例年の子どもたちの姿と今年の子どもたちの姿を比較した発言であった。

＜発言b-1＞：A

今年は、ちょっとパニックになっちゃうとかね、そういう子もいたりしたりするもんだからね。

園長Aは、例年秋に実施している予告なし訓練の延期について悩んでいた。この発言からは、訓練時にパニックになってしまう子どもが例年以上に多いため、子どもの姿に応じた対応が園長Aに求められていることが読み取れる。

＜発言b-2＞：B

今年は特に、防災頭巾をね。上手く被れない子が4月に多かったものですから、防災頭巾ゲームみたいなものを（活動として）取り入れてね。

保育者Bも、例年以上に子どもたちが防災頭巾をスムーズに被れないことを指摘していた。保育者Bは、防災頭巾を被る練習をゲーム感覚でできるような活動を頻繁に保育に取り入れることにより、課題の解決を試みていた。

(2) 各学年における子どもたちの姿の違い

Y幼稚園の園長Aの＜発言b-3＞は、各学年における子どもたちの姿を比較した内容の発言であった。

＜発言b-3＞：A

3歳はとてもできない（訓練内容な）ので、先生の指示を聞いたりとか、防災頭巾の被り方を知るとかそんな風にしていますね。年中・年長がJアラートって言って緊急地震速報を聞いて、すぐに外に出て、ダンゴムシのね。固くなってね、石のようになってっていうような、ところを（年少に）見せるとかっていうようにして、Jアラートを使った避難訓練を最初の頃よくやっているんですけど。

園長Aの発言からは、年少と年中・年長では訓練内容が異なっていることが読み取れる。訓練内容は学年が上がるにつれて経験が積み重ねられるため、より高度な内容になっているようであった。

Z幼稚園の3歳児クラス保育者E2と5歳児クラス保育者Gは、各学年における子どもたちの姿が異なることを活かした具体的な異年齢の教育・保育活動について、＜発言b-4＞の発言をした。

＜発言b-4＞：E2

紙芝居で見るとところからすれば、紙芝居・絵本で見せた後に、いきなり訓練ではなくて、最初は本当にテラスからお兄さん、お姉さんを、年中・年長さんの姿も、もう第1回目の（訓練の）時は見るんですよ。それも、もうビックリっていうか。

保育者E2の発言からは、年少が年中・年長の訓練の様子を見ることで、結果として年中・年長が年少に対する避難の行動見本を示す役割を果たしていることが読み取れる。さらに保育者Gは、防災活動を通して子どもたち自身が幼稚園における役割を自覚していくことについても言及していた。＜発言b-5＞は、それを表す発言であった。

＜発言b-5＞：G

それ（年少さんに行動の手本として見せること）でやっぱりそこで僕たちが小さい子たちを守らなきゃいけないっていう気持ちがすごい伸びますね。

＜発言b-3＞と＜発言b-4＞の2つの発言から、防災活動では各学年における子どもたちの姿には違いがみられ、その違いを活かした異年齢の教育・保育活動に取り組むことによって＜発言b-5＞のような子どもたちの成長

にもつながっていくことが示唆された。

3. 2. 2 教育・保育活動を通じた経験の積み重ね

防災活動は単にその活動を繰り返すだけではなく、徐々に活動内容をステップアップさせながら経験を積み重ねていくことが重要であると考えられる。Z幼稚園の保育者E1による＜発言b-6＞は、それを端的に表す発言であった。

＜発言b-6＞：E1

3歳さんは（幼稚園に入園して）きて初めて、避難訓練っていうのを体験するので、イメージがまず全くね、持てないと思うので、防災に関しての紙芝居とかそういう本がやっぱりたくさん置いてあるので、逃げる場所の絵だったり、危険がないように歩く様子だったり、そういうのを紙芝居で見せたりしながら、ちょっとずつイメージが持てるようにしたり、あとはほんとに地震とかそういうのの話をして、怖いことなんだよっていうのを伝えながら避難訓練に参加できるように、今しています。

保育者E1は、避難訓練のイメージが持てるような防災活動から始め、徐々に避難訓練に参加できるように活動内容を工夫していた。また、園長Aの＜発言b-3＞や保育者E2の＜発言b-4＞からも、学年が上がるごとに徐々に防災活動の内容をステップアップさせ、着実に経験を積み重ねていっていることが読み取れる。

Y幼稚園の4歳児クラス保育者Bは、避難訓練の際に練習している自分の頭を守る行動の獲得について、経験を積み重ねることによって生じる子どもたちの行動変化について、＜発言b-7＞の発言をした。

＜発言b-7＞：B

またちょっとしない、やらないときっと忘れちゃう子もあるので。たまたま覚えていた子たちがしっかり（意識を）持っていたのかもしれないので、その辺の確認はね、まだちょっとできてないですけども、動きは全然違います。最初の言うか言わないか、その時に比べたら。伝えていくっていうことはやっぱり大事なのかなあと。

保育者Bは、経験を積み重ねていく過程に着目し、その変化が必然ではなく、偶然であった可能性を指摘していた。同様な指摘は、Y幼稚園の5歳児クラス保育者CやZ幼稚園の園長Dにもみられた。これらの発言からは、子どもたちの動作の変化が必然的なものであるかという確認をその都度、園長や保育者が実施していることが読み取れる。

3. 2. 3 視覚情報の有効活用

防災活動において子どもたちの情報理解を促進させるためには、「絵」による視覚情報の提示が効果的であると考えられる。

Z幼稚園の5歳児クラス保育者Hは、クラスにおける防災活動の工夫について、＜発言b-8＞の発言をした。

＜発言b-8＞：H

私はその避難の仕方がやっぱりこう言うだけじゃあ、子どもたちやっぱり分からない部分があるので、あの視覚標って言うか、あの絵でやっぱりしるして、子どもたちにこう見せることで、（中略）こうパッと意識がそこに向かうようにしていたりとか。

保育者Hはオリジナルの視覚標を作成し、防災活動での活用留まらず、特別な支援を要する子どもへのサポート手段としても活用しており、その効果を実感しているようであった。保育者Hの発言から、「視覚標」とは「視覚的な標示」を指していると考えられる。また、Z幼稚園の園内には、災害時の避難行動や避難経路に関するイラスト入りの掲示物が廊下や保育室内など、子どもたちの目に留まりやすい所に掲示されていた。Z幼稚園の3歳児クラス保育者E2は防災活動における「絵」の活用として、この掲示物について言及していた。

Z幼稚園の4歳児クラス保育者F2は、「絵」による視覚情報の提示が子どもたちの情報理解を促進させると考えていることが＜発言b-9＞から読み取れる。

＜発言b-9＞：F2

子どもってやっぱり視覚からすごいもの（情報）が入るので。紙芝居とか、その防災教育の教材をすごい使ったりはしてます。

保育者F2は、防災教材として「紙芝居」を頻繁に活用しているようであった。事前にK市のこども希望部こども希望課の担当者から、市内の幼稚園では「視覚からわかりやすいように紙芝居や絵本を使用し防災教育に努めています」との情報を得ていたため、多くのインタビューが言及すると予測をしていた。しかし、予想に反し、実際にイ

ンタビューで言及していたのは園長Aの他に、Z幼稚園の3歳児クラス保育者E1・E2と4歳児クラス保育者F2のみであった。また、絵本や紙芝居を使った防災活動について発言した際、いずれのインタビューーも、他の内容の発言や、他のインタビューーの発言に触発される形でふと思い出した様子で発言していた。これらの状況から、絵本や紙芝居を使った防災活動が常態化している可能性が高いといえる。

3. 3 防災活動により目指されること

防災活動により目指されることに関する発言はY幼稚園とZ幼稚園の両インタビューーにみられ、「災害に対応できる体づくり」として整理された。

3. 3. 1 災害に対応できる体づくり

「災害に対応できる体づくり」についての発言内容を「体力づくり」と「反射的な災害対応行動の獲得」の2点に整理した。

(1) 体力づくり

Y幼稚園の4歳児クラス保育者Bは、災害に備えた保護者との関係づくりの在り方について尋ねた際、＜発言c-1＞の発言をした。

＜発言c-1＞：B

階段をね、上がっていけない子が。上手に上がっていけない子がいて、そういう子に対しての保護者の方には、公園なんかの階段をちょっと遊びながら歩いてみると、本当の地震が来た時に安心して急いで逃げれるからね、（以下略）

保育者Bは、保護者との会話の中で具体的な子どもの様子を伝えることの心がけにより、保護者との関係づくりに努めていた。＜発言c-1＞は会話の具体例であったが、その内容は災害に対応できるような体力づくりの必要性を指摘するものであった。同様な発言として、Z幼稚園の4歳児クラス保育者F2による＜発言c-2＞がある。

＜発言c-2＞：F2

遊びに力も入れているので、そのためじゃないんですけども、そこで運動遊びもたくさんして、津波きた時に、「脚が弱いと逃げれなくなっちゃうんで頑張ってよ」って話はしてます。

保育者F2の発言は、実践している防災活動について尋ねた際の発言であった。＜発言c-1＞における保育者Bの呼びかけは、保護者に向けたものであり、＜発言c-2＞における保育者F2の呼びかけは、子どもに向けたものである。発言における呼びかけの対象は異なるものの、いずれのインタビューーも保育者が災害に対応できるような体力づくりの必要性を認識していることが読み取れる。

また、K市では就学前施設の子どもの体力づくりを強化するプロジェクトを実施していた。Z幼稚園の園長Dは、そのプロジェクトについて、＜発言c-3＞の発言をした。

＜発言c-3＞：D

K市の“アクティブチャイルドプログラム”のね、あれ（体力づくり）を推進しようっていうことで体力づくりをやっているんですが、ほんとに体力作っておくのがもとで、子どもが瞬発的にね。色んな行動がとれるっていう体にしとくのが大事なって。

園長Dはこの発言に加え、幼稚園における体力づくりを推進するための環境として、子どもたちが自ら体を動かしたいと思えるような人的・物的環境を保育者が構成していくことの必要性についても指摘していた。

(2) 反射的な災害対応行動の獲得

Z幼稚園の4歳児クラス保育者F2は、普段から子どもたちに園内放送や保育者の話をしっかりと聞けるような意識づけを心がけていた。保育者F2の＜発言c-4＞は、その心がけで得られた成果についての発言であった。

＜発言c-4＞：F2

やっぱ、多分3歳からすごい積み重ねてきているので、3歳ですごくしっかりやってきてるからこそ、多分4歳になると、先生が何か言わなくても自分で何とか聞かなきゃいけないとか、動かなきゃいけないっていうのが、体が勝手に身についているっていうか、感じなので、もうね。

保育者F2の発言からは、幼稚園生活における3年間の教育・保育活動を通じた経験を積み重ねていくことにより、園内放送や保育者の話を聞く場面において、自然と体が聞くための姿勢を整えることができるようになっている

ことを実感していることが読み取れる。

Z幼稚園の園長Dは、就学前施設における防災では、災害時に子どもたちが反射的な対応行動が取れるようにしておくことを目指すことの必要性について、＜発言c-5＞のような指摘をしていた。

＜発言c-5＞：D

学校みたいに色々理論が分かってきて、こういうメカニズムでこういう風に起きてくるんだよっていうのよりは、年齢が小さいだけに、対応訓練？そう、体が対応できるとか、心が強くなるとか、そういう「あっ、地震が起きてもこうすればいいんだ」っていうのが体の中にそれこそね。

Piaget, J. (1970/2007) によると、具体的な事物や事象を用いての論理的な思考が可能になるのは具体的操作期と呼ばれる児童期である⁽¹⁵⁾。論理的な思考ができるようになれば、災害のメカニズムについての理解が可能になるため、災害について考えたうえでの対応が可能となる。しかし、幼児期では、それにはまだ困難を伴う部分があるだろう。したがって幼児期では、災害への対応の仕方が体の動きとして自然に取り込まれている状態、反射的な対応行動が取れるようにしておく必要がある。園長Dの＜発言c-5＞は、それを端的に表す発言であったといえるだろう。

3. 4 防災活動の限界

防災活動の限界に関する発言はY幼稚園とZ幼稚園のいずれのインタビューにもみられ、「予測できない災害時の精神状態」と「変えることが困難な立地条件」の2点に整理された。

3. 4. 1 予測できない災害時の精神状態

訓練は災害の状況を想定して実施することになるが、災害は起こり得る状況をあらかじめ完全に想定しておくことができないという特性を有している。したがって、事前に災害時における被災者の精神状態を想定することは不可能に近いだろう。保育者は、子どもの災害時における精神状態の想定が極めて困難であると感じていることが示唆された。Y幼稚園の4歳児クラス保育者Bの＜発言d-1＞とZ幼稚園の園長Dの＜発言d-2＞は、予測できない災害時の子どもの精神状態を案じる発言であった。

＜発言d-1＞：B

（いつも訓練でできていても）動けなくなっちゃう子もでてくるかもしれないし、避難訓練だっていう、その分かっている間の子どもの姿と突然起きた場合とはね。きつとはるかに、子どもの状態も変わってくるだろうしね。

保育者Bは、子どもたちが訓練では確実な対応行動をとることができていても、災害時の精神状態は平時とは異なることが予想されるため、災害時に子どもたちが適切な対応行動をとることができるか不安に感じていた。

＜発言d-2＞：D

今はみんな元気で避難していますが、その時の精神状態とかもきつとね。パニックになっちゃったりビクビクしちゃうっていう子もあると思いますので。でも訓練を数やってれば、そういう時にも「あそこへ行けば大丈夫」ってね。子どもの中にも、あの刷り込みって言うか、してくれたらなって思いますけれども。

園長Dも保育者Bと同様な発言をしていたが、より端的に「精神状態」という言葉を用いて災害時の子どもの精神状態についての不安を表していた。園長Dは、繰り返しの訓練を実施することによって災害時に適切な対応行動をとることができるように備えておくことに加え、そのことによって子どもたちが自分の心の中に安心感を抱けるようにしておくことが重要であると考えていることが読み取れる。

3. 4. 2 変えることが困難な立地条件

防災活動における物的条件の整備には莫大な経費と時間が必要であり、人的条件の整備に比べると困難性が高いといえる。しかしながら、物的条件の整備の中でも最も変更が困難とされる園舎の立地条件さえ変えることができてしまえば、解決してしまう課題も多いことは事実である。インタビューは、災害対策としての実現可能性が低いことを認識しているにもかかわらず、園舎の移転による条件の改善を望んでいた。Z幼稚園の4歳児クラス保育者F2と5歳児クラス保育者Gは園舎の移転について、次のような発言をした。

＜発言d-3＞：F2

一番良いのは幼稚園が、海沿いからなかに。もっと高い方に動くのが一番良いですけどね、なかなか多分。

保育者F2の発言は、災害に備えた園外の機関との協力体制の構築、あるいは強化の在り方について尋ねた際の発

言であった。保育者F2は、現在よりも高い位置への園舎の移設が不可能であると断言することを取って避けていた。保育者F2は、現在よりも高い位置への園舎の移設を望んではいるものの、その実現可能性が極めて低いことを認識している故の発言であったと考えられる。保育者Gも同様な場面で＜発言 d-4＞の発言をしていた。

＜発言 d-4＞：G

この幼稚園自体がほんとに安全な場所に建てられるというか移動できるのがね。一番の協力なんじゃないかなっていうのは、思っているんですけども。

保育者F2も保育者Gも、災害時における協力体制の理想を語っていく中で、協力体制を築いていくことや強化していくことに限界があることを実感しているようであった。

4 本研究の結論と今後の課題

2園の園長と保育者の発言から、就学前施設における防災活動に必要な条件について検討した。防災活動に関する発言の中で最も多かったのが避難訓練に関する発言であった。このことから、避難訓練は就学前施設における防災活動の中心となっていると考えられる。

インタビューの防災活動に関する発言は「防災活動が盛んであることの原拠」、「防災活動の実態」、「防災活動により目指されること」、「防災活動の限界」の4つの観点から整理された。「防災活動が盛んであることの原拠」により、調査対象となった2つの幼稚園の中でも、特にZ幼稚園における防災活動が盛んであることが裏付けられた。また、このような防災活動が盛んな幼稚園における取り組み（「防災活動の実態」）が、どのようなことを目指して取り組まれているのか（「防災活動により目指されること」）、防災活動のどのような点に限界を感じているのか（「防災活動の限界」）ということ把握することにより、今後の就学前施設における防災の在り方を検討するための手がかりとなり得る条件を見出すことができると考えた。その条件は次の3つに整理された。

一つ目は、子どもの姿に応じた教育・保育活動である。子どもたちの姿は、経時による発達変化のような内的要因だけではなく、周囲の環境からの外的要因によっても変化する。子どもの姿は常に変化し続けるため、その時の子どもたちの姿を捉えることが重要である。調査した2つの幼稚園における防災活動では、インタビューが子どもたちの現状の姿を捉え、その姿に応じた教育・保育活動を行うように努めていることが伝わってきた。

二つ目は、教育・保育活動を通じた経験の積み重ねである。前述の子どもの姿に応じた教育・保育活動には、活動内容を徐々にステップアップしていくことも含まれていた。このような活動経験の積み重ねにより、子どもたちの活動の様子にも変化がみられていた。また、防災活動としての異年齢の教育・保育活動は、子どもたち自身が幼稚園における役割を自覚していくことにもつながり、通常教育・保育活動にも良い影響を及ぼすことが期待される。

三つ目は、視覚情報の有効活用である。各クラスの保育者による発言を概観してみると、「絵」というキーワードが浮上してきた。日々の教育・保育活動と同様に防災活動でも、絵本や紙芝居が積極的に活動として取り入れられ、子どもたちが行動の見通しを持てるようにするために活用されていた。「絵」による視覚情報の有効活用は、絵本や紙芝居の使用だけに留まらず、避難時の行動を示した視覚標や掲示物にもみられた。

これら3つは防災活動に限らず、保育者が通常教育・保育活動の内容を構成する際にも共通して考慮する条件である。災害に対応できる体づくりを目指して、これらの条件を含んだ防災活動や日々の教育・保育活動を検討していく必要があるだろう。また、就学前施設における防災活動の主な担い手としては園長や保育者、子どもたちが挙げられる。しかし、インタビューの発言の中には、＜発言 a-5＞のように保護者にまで言及した発言も見受けられた。Z幼稚園の職員玄関には手作りの防災マップが掲示されており、4歳児クラス保育者G2からは保護者が自主的に作った防災マップであることを知らされた。防災活動というと、教育・保育活動を通じた取り組みのみを想定してしまいやすい。今後、そのような既成概念にとらわれずに防災活動をより広い取り組みとして捉え、検討していくことも必要だろう。

謝辞

調査にご協力いただきました幼稚園の園長様ならびに保育者様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- (1) 地震調査研究推進本部. (2019). 主な海溝型地震の評価結果(地震発生確率). 地震調査研究推進本部ウェブサイト.
[〈https://www.jishin.go.jp/main/img/hyoka_kaiko_prob.pdf〉](https://www.jishin.go.jp/main/img/hyoka_kaiko_prob.pdf) (2019年9月15日)
- (2) 内閣府. (2006). 災害時要援護者の避難支援ガイドライン. 防災情報のページ.
[〈http://www.bousai.go.jp/taisaku/youengo/060328/pdf/hinanguide.pdf〉](http://www.bousai.go.jp/taisaku/youengo/060328/pdf/hinanguide.pdf) (2017年7月26日)
- (3) 中央防災会議. (2018). 防災基本計画. 防災情報のページ.
[〈http://www.bousai.go.jp/taisaku/keikaku/pdf/kihon_basic_plan180629.pdf〉](http://www.bousai.go.jp/taisaku/keikaku/pdf/kihon_basic_plan180629.pdf) (2018年8月19日)
- (4) 公益社団法人 土木学会. (2006). 巨大地震災害への対応検討特別委員会報告書. 土木学会ホームページ.
[〈https://www.jsce.or.jp/committee/kyodai-jishin/1803files/1.pdf〉](https://www.jsce.or.jp/committee/kyodai-jishin/1803files/1.pdf) (2017年2月14日)
- (5) 文部科学省. (2013). 学校防災のための参考資料「生きる力」を育む防災教育の展開. 文部科学省ホームページ.
[〈http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/anken/1289310.htm〉](http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/anken/1289310.htm) (2017年2月14日)
- (6) 高橋多美子・高橋敏之. (2008). 地域と連携した幼児期における地震防災教育の普及. *保育学研究*, **46**(2), 299-309.
- (7) 高橋多美子・高橋敏之. (2008). 幼児期における地震防災教育の実践モデル. *子ども社会研究*, **14**, 105-115.
- (8) 山田伸之・丁子かおる. (2016). 和歌山市立岡山幼稚園での地震防災保育についての一考察. *和歌山大学防災研究教育センター紀要*, **2**, 44-49.
- (9) 伊村則子・石川孝重・小川裕美. (2006). 自治体と幼稚園の防災教育の現状調査をふまえた絵本教材の試作－市民の防災力向上に向けて その2－. *日本建築学会大会学術講演梗概集*, 461-462.
- (10) 小川裕美・石川孝重・伊村則子. (2006). 幼稚園の教員評価および実習にもとづく早期防災教育としての絵本教材とその評価－市民の防災力向上に向けて その3－. *日本建築学会大会学術講演梗概集*, 463-464.
- (11) 伊村則子・石川孝重. (2008). 幼稚園の現状調査に基づく早期防災教育教材の制作. *日本建築学会関東支部研究報告集*, **II** (77), 221-224.
- (12) 渡邊愛美・石川孝重. (2009). 保護者にも実効がある子供向け防災絵本の提案－市民の防災力向上に向けて その19－. *日本建築学会大会学術講演梗概集*, 513-514.
- (13) 岡本和花・白神敬介. (2019). 保育所における保育者の防災に取り組む姿勢. *厚生指標*, **66**(2), 33-40.
- (14) 内閣府. (2016). 日常生活における防災に関する意識や活動についての調査結果について. 防災情報のページ.
[〈http://www.bousai.go.jp/kohou/oshirase/pdf/20160531_02kisyu.pdf〉](http://www.bousai.go.jp/kohou/oshirase/pdf/20160531_02kisyu.pdf) (2017年6月28日)
- (15) Piaget, J. (2007). ピアジェに学ぶ認知発達科学(中垣 啓, 訳). 京都: 北大路書房. (Piaget, J. (1970). Piaget's theory. In P. H. Mussen (Ed.). New York: John Wiley & Sons.)

Exploratory Study of Disaster Prevention Requirements in Preschools

Kazuka OKAMOTO* · Keisuke SHIRAGA**

ABSTRACT

This study sought to determine the requirements of conducting disaster prevention activities in preschools. We selected two kindergartens with progressive or distinctive disaster prevention activities and conducted semi-structured interviews with two directors and seven teachers. The interviewees' responses revealed four perspectives: "the basis for proactive efforts toward disaster prevention," "the measures taken for disaster prevention," "the aims of disaster prevention initiatives," and "the limitations of disaster prevention efforts." Further, three points were considered regarding disaster prevention efforts in preschools: "implementing disaster prevention activities consistent with the children's developmental stage," "accumulating experience through disaster prevention activities," and "the effective use of visual information during disaster prevention activities."

* Kindergarten Attached to Joetsu University of Education ** School Education